

---

---

## 上村洋一「Here and Gaza」上映会の開催にあたって

サウンドアーティスト上村洋一による本作は、知床の流水の音とガザから発信された映像の音を基に構成されています。これまで現実と抽象性の融合で自然の情景を再現してきた上村ですが、本作ではガザでの実際の暴力の音を含むなど、作家の危機感が直接的に反映されています。そのため、ご視聴に際しては注意が必要となりますが、その背景には進行中の暴力の映像を自己体験化し、音で共有し、さらにはその暴力を止めたいという作家のやむに止まれぬ強い衝動があります。

特に、本作ではサウンドに留まらず、作品中に流れる現場の人々の言葉のいくつかに字幕を付けます

想像を絶する状況下から放たれたその声は、それが「群衆ではないひとりの生」であることを私たちに強く突きつけるでしょう。

今年2月、国際司法裁判所は、ネタニヤフ政権率いるイスラエルによるガザのパレスチナ人虐殺（ジェノサイド）の可能性を上げ、暫定的な措置を命じました。ガザの保険当局によれば、すでに3万人もの死者が出ており、その40%は子供だと言われています。ほとんどの市民が家を失いましたが、国連は今後数週間でそのうち数千人が餓死する可能性を警告し、イスラエルはその避難民が集まるラファにまで地上作戦を進める構えです。

現在、世界中で停戦を求める行動が広がっています。日本でもデモやフォーラムが連日開催されていますが、一方で無関心な人もなお多く、また問題意識を持っていても孤立する人も多くいます。多様な表明や表現があっても、多様な人々が問題を受け取れる——そのひとつとしてのアートの可能性に期待し、本展開催にいたりました。

しかし、当事者やこの数ヶ月間虐殺と向き合い続けてきた方々は、現地での痛みを毎日のように心を痛めながらサバイブやアクションを継続中です。上村の気持ちは抗議運動と共にありますが、「刺激に傷つく」可能性がある人々には特に配慮が必要ですし、「作品化する」こと自体にも議論があります。そのため、皆さまの口コミ以外に情報は公開しない形とし、その代わりに議論を深め、個人の思考や行動に訴えかける機会としました。

SNSなどへの投稿は避け、メディアへの掲載にはご一報ください。

ご招待の基準は、WHITEHOUSE会員の皆さまと、主に旧知の日本のアート従事者の皆さまです。

---

---

March 8, 2024

Yoshiaki Kawanishi

---

---

振り返れば、ハマースが選挙で政権を獲得した直後から建設されたガザの隔離壁の内側で、市民は剥き出しのアパルトヘイト（人種隔離体制）を生きてきました。18年の非武装デモ「帰還の大道行進」にも銃弾は向けられ、なすすべを失っています。今回、イスラエルは自らの侵略的な姿を世界に露呈しましたが、それを歴史的に許してきたのは、そんな状況を黙殺・容認してきた「国際社会」でした。いまやグローバルとなったアート界も当然その一員ですが、その向き合い方には問題があると言わざるを得ません。

ウクライナでのロシア非難とは対照的に、欧米のダブルスタンダードは明白です。アメリカは「テロとの闘い」とお墨付きを与え、国連の停戦案に拒否権を発動。ドイツやフランスではパレスチナ支持のデモが禁止され、言論弾圧が強まっています。

先住民の権利が謳われる昨今、パレスチナでは先住民の民族浄化が進行中です。脱植民地主義が叫ばれる21世紀にあって、「中東唯一の民主国家」による入植植民地主義は激化しています。

アートの諸問題に照らせば、ドクメンタ15の炎上、次回ドクメンタの芸術監督選考委員の全員辞任、パレスチナへの共感を示すアイ・ウェイウェイやアパルトヘイト反対の署名を行ったローリー・アンダーソンのキャンセルなど、業界はかつてない危機に直面しています。美術館はじめ主要機関の沈黙は、自らの存在意義を否定しているようです。このまま何も変わらないのであれば、今後、アート界への未練を捨てるひとも増えるでしょう。

最後に、上映会の参加にはハードルを感じるがミーティングには参加したい、という方のご来場も受け付けています。その場合は上映の終了をお待ちいただき、ご入場ください。

本展が私たちにとってポジティブな一歩となることを、願ってやみません。

どうぞよろしく申し上げます。

WHITEHOUSE